

## 「ファッハホーホシューレ」

### —ドイツの高等教育システムの現状と新タイプ大学—

#### “Fachhochschule” — The Higher Education System in Germany Today

田中宏幸  
Hiroyuki Tanaka

#### 現代ドイツ高等教育システムの概要<sup>(1)</sup>

ドイツの大学といえば「研究中心の機関」としてのイメージが強いが、もともとはドイツの大学も当然「教育中心の機関」であった。「研究中心の機関」になったのは歴史的には十九世紀末以後のことである。中世の大学の起源にまでさかのぼることは本日のテーマの範囲を越えるので差し控えたいと思うが、一寸遡って見ると系譜的に今日のドイツ大学の基本となったのは宗教改革（1517、16—17世紀）以後ドイツの諸邦の領主がそれぞれの小国家の官吏や聖職者、教育者、司法家などの養成のために設立した「領邦〔地方〕大学」Landeshochschuleであった。これらの大学にはすでに中世とは異なる新しい精神が流れていたが、次第に「古典的人文主義的精神」に満たされたドイツ型大学が形成されるに至った。それが最も明確な形をとったのは周知の通りバルリン大学（1810）であったと思われる。ここでヴィルヘルム・フォン・フンボルトを代表とする当時の知識人がイメージした大学の理念は、その後いわば文化遺伝子のように世界の大学に受け継がれることになった。その理念は、念のため繰り返せば「学問の総体」「研究の重視」「研究と教育の統合」あるいは「研究による教育」「学問の自由」—これには「研究・教授・学習の自由」が含まれるが—そして「大学の自治」といったキーワードに要約されるであろう。これらのキーワードは恐らく今日広く馴染みの概念となっているので、それがドイツからきたものであった、ということほとんど意識されていないという状況になっている。しかし実はこのタイプの大学の「理念」は史上ドイツが世界にもたらした最大の貢献であったという説があり、これは首肯せざるをえないであろう。しかし注目されなくてはならないのは、ドイツの大学では確かに「研究」は重視はされたが、それは何より「教育」と連携することに重心があり、その限りでは大学はまず「教育機関」であったということであろう。いわゆる「フンボルト型大学」は、しばしば研究中心の大学とみなされるようになってきているが、元来本質的には「教育機関」であったことは改めて銘記すべきであろう。因みにフンボ

ルトには教授職の業績主義など全く念頭になかったという説もあるらしい。しかし、ドイツの大学はその後十九世紀末に向かって科学技術の進歩・発展のリーダーシップをとる研究機関と化して行く。十九世紀の重要な研究は全て大学で開始されるか、そこで完成されたといっても過言ではない。その結果「研究中心機関」というイメージを強めることになった。当時、ドイツの大学に留学した他国の学生や研究者は、貧弱な自国の大学の改善のためにドイツの大学の理念、特に「研究」を重視する意義を学んで帰ったといわれている。確かに「学問」「ヴィッセンシャフト」Wissenschaftという言葉のなかには、英語の「サイエンス」science—これも元来ラテン語 scire, sciri: know, discernが語源であるが英語圏では通常そのような語源までは理解されていない—にはない意味があるということ、すなわち「知ること wissen（動詞）と積極的に関わる」「献身的な神聖な学問的追及」の意味を解説した成果には大きいものがあつた。<sup>(2)</sup> それはその意味にこそ「研究」と「教育」の連携という形での学問との関わり意義があつたわけであるから。こうしてアメリカ、イギリス、フランスなど、それぞれ何らかの形でこの理念から影響を受けた。いわば十九世紀ドイツでの科学技術の発展の秘密を大学の理念の中にかぎつけたわけであろう。しかしドイツではその間に研究熱心の余り教育が次第に顧みられなくなるという傾向が強くなってきた。元来フンボルト型大学には、見方によっては学生が放任されているという印象があつた。すなわち具体的な学習カリキュラムは示されず学生の側にもいわゆる「学習の自由」Lernfreiheitが存在し、何をどう学ぶかといったことは、ほとんどは学生の自主性に委ねられていた。このような制度がこのような傾向に陥らせることに手を貸したことは十分考えられる。それはともかくとして、とりあえず当時の大半の外国人は、学問研究の機関としてのドイツ大学の成果に目を見張り、その研究重視の視点を評価したのであつた。しかし、すでにこうした研究中心の大学の在り方に疑問を投げ掛けていた知識人もあつた。その代表がスペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットであるが、オルテガは自らのドイツ留学時代を回顧し

て教育機関としてのドイツ大学を痛烈に批判している。

例えば「科学と〔狭義の〕大学との混同から生じた悪い結果の一つは、われわれの時代の偏執にとらわれて、教授職を研究者に与えてしまったということである。しかし研究者は多くの場合、教師としては大変貧弱である。彼らは、授業というものは、実験室や記録室での仕事の合間を盗んで、それにあてるものだと思っている。ドイツに留学していた数年間に、私は今日有名な多くの学者に接したけれども、真によき教師には遭遇しなかった。それで、ドイツの大学は制度として模範であると、とりたてて語ってもらいたくない」<sup>(3)</sup>と記している。傾聴したい言葉であろうと思われるが、これが既に二十世紀30年代の発言であったことは、その後の展開を見ればまことに炯眼と言わなくてはならない。

その後間もなく周知のごとくドイツの大学は「理念」も「現実」もすべてはナチスのイデオロギーの犠牲になった。その12年のナチス支配が終わった後、間もなくハイデルベルク大学学長に選ばれ、大学の復興に努めた精神科医・哲学者ヤスパースがまず強調したのは、特にフンボルト以来明確にドイツの大学に生命を吹き込んできた「理念」の想起であったが、このことは注目されるべきであろう。<sup>(4)</sup>これなくしてはドイツの大学に生命は蘇らないと考えたのであったから。そしてさらに41年後の1986年に創立600年を迎えたハイデルベルク大学（1386年創立；参考：プラハ大学は1348年、ウィーン大学は1365年）の記念シンポジウムのテーマもまたこの大学の「理念」であったことは記憶されなくてはなるまい。<sup>(5)</sup>こうして、その理念の根幹は揺ぎなく伝えられているかのようなではあるが、他方、その理念は新しい時代にそのままが良いか、二十一世紀に向かっても耐えうるものであるかどうかは根本的に検討されなくてはならなかったのも事実である。このようなドイツの大学の理念の現代における問題点については、概要を本学会の『論集』<sup>(6)</sup>に既に掲載したので、ここで詳細を繰り返すは避けたい。ここでは特に教育面についての問題点とその妥協策ないし現段階での解決策について報告したい。

結果を先取すれば「伝統的大学」と「新タイプ大学」という「二つの大学類型」システムがその解決策であった。もちろん「伝統的大学」にも新しい時代の要請に即した修正・改革がほどこされたが、それとは別に新タイプ大学が設立された。こうして目下のドイツの大学システムには、二つの大学類型が存在することになる。DAAD1999年の資料<sup>(7)</sup>によれば当時広義の大学、すなわち「高等教育機関」Hochschuleは323校設置され、このうち伝統的大学が118校、その内訳は「総合大学（ユニヴァーシティ）」Universitaetおよびこれと同等とみなされてきた「工科大

学」Technische Universitaet [TU] / Techn. Hochschule [TH] 90校、「教育大学」Paedagogische Hochschule [PH] 7校、「連合大学」Gesamthochschule [GHS]が7校、そして我々からみれば特殊であるが「神学大学」Theologische Hochschuleが14校である。そしてもう一方の柱でありここで特に焦点を当てたい新タイプの大学は「ファッハホーホシューレ」Fachhochschule（専門実業大学、以下随時FHと略す）と称され、全体として伝統的の大学類型を上回る153校設置されている。しかしこのうち31校の「行政専門大学」Verwaltungsfachhochschuleは主として公務員用の研修大学で一般学生は入学できないので除外すると122校のファッハホーホシューレが門戸を開いている。なお工科大学はかつては工学系の実践的専門分野に限定されていたが、現在はこれを中心に総合的な組織となっており、また連合大学は一部の州で設置された大学類型で、総合大学・教育大学・専門実業大学・芸術大学などの連合組織をもつ機関で今日あわせてユニヴァーシティという名称を添加している。教育大学は初等・中等教育の教員養成大学、なお行政専門大学は行政類似機関に所属する外国人留学生は受け入れているようである。因みにこの類型大学は英語ではCivil Service Training Collegeと訳されている。なおこれと平行して第三の大学類型として52校の芸術系の大学が存在する。これを入れれば厳密には3類型あることになる。

ここでついでに記せば、設置者は日本、アメリカなどとは異なり大半が国立（具体的には州立）で、幾らかの教会関係団体と約1割の私立大学がある。ただし私立大学の学生数は1%程度と極端に少なく、確かに新しい私立大学設立は大学経営・教育・研究の刺激にはなっているが、ドイツ大学事情を報じた日経新聞の「私立の設立ブームが生じ国立の改革を促している」<sup>(8)</sup>という状況ではない。大学の大幅の自治を認めつつ国（州）が積極的に支援かつコミットするという態度・制度は、少なくとも現段階では揺らぐ気配はないかのようなのである。

ここでこのような新タイプ大学「ファッハホーホシューレ」が誕生した経緯ということになるが、それは要約すれば伝統的理念の大学では、現代の「社会」の高等教育に対する要請に対応できなくなったという点にある。その第1の要因は学生数の増加、ないし大衆化あるいは民主化。さまざまな前提・能力と目標をもった多数の学生。第2に科学技術の著しい発展が大学組織にその対応を迫ってきた。例えば研究重視といっても大学の研究能力は財政面では明らかに相対化されることになり、民間・業界との協力が他国の趨勢でもある。第3に産業界の後進リクルート養成への要請、すなわち現代の科学技術の進歩発展に対応できる高度の職業人育成への要請に対応できなくなってきた。つ

まり旧態の大学教育システムでは労働マーケットにマッチしないということである。そして第4に予算規模の増大、高等教育に対する連邦政府、州政府のコミットメント、あるいは出資者としてどのように関わるかなどに要約される問題が生じてきた。これに加えれば国際化の時代にドイツ大学システムは適切かどうかという問題も重要であった。こうしてドイツでは60年代以降、他国の制度をも睨みながら、論議と試行錯誤が繰り返され、徐々に大方のコンセンサスを得てこの新類型大学のシステムが整備されるに至ったわけである。

この大学ないし高等教育機関（因みに先にも触れたように Hochschule には大学ないし高等教育機関という広義の意味があり狭義には単科大学の意味で用いられる）の新類型の並行的設置という解決策は、このいずれの要因とも関わるわけで、具体的に教育問題のみを中心に考えれば「研究と教育の統合」および「学習の自由」というかつての理念が現代的観点から見れば経済的には機能していないという点の改善策である。すなわちフンボルト型大学では研究が教育的にも重視されてきたが、その際、学生がどのように学ぶかについての具体的・強制的なカリキュラムは示されず学生の裁量に委ねられてきた。これが先にも触れた「学習の自由」と称されるもので、これは「教授（と研究）の自由」Lehrfreiheitと同様に重要視されてきた。あれこれ指示が与えられるのではなく学生が試行錯誤しながら自ら何をどのように学ぶかを孤独のうちに見出していくという教育方針が根底にあった。時には何をなすべきか分らず無駄な数年を過ごしてしまうという自由も存在した。けだしその数年は無駄ではなく有効であるという観点が支持されてきた。こうした教育により真の「知的人格完成」「知的誠実さと規律」「精神的自主性」、要するに「博識」とは区別される真の意味の「教養教育」が可能であると久しく考えられてきた。他の理由も関わるが、現今でもドイツの伝統的大学の在学期間は一般に他国に比べて長く（6-7年）また卒業年齢も平均28.9歳と高くなっている。卒業年齢の高齢化は、原則的に19歳で入学資格があるにもかかわらず、原因については不詳であるが入学年齢が平均22歳と高くなっているのも関係がある。兵役・代替奉仕などが関係する可能性もあろう。こうした高等教育期間の長さは他方で大学予算の増大の原因のひとつにもなり、国家社会全体としても不経済、また国際的な競争力という点でも不利な状況と見なされるようになったのは自然の成り行きであろう。因みにわが国などで一般的な入学試験制度はなく「高等学校（Gymnasium）卒業資格」Abiturを取得すれば一部を除き希望の大学に入学できる。この点では制度的には学生の方の負担は少ないといえる。また私立を除き学費は原則的に無料という制度は維持されている。そ

の分学生の経済的負担も少ないわけである。

ところでこれらの状況は、特に産業界からの「高度な能力を備えたリクルートを」というもっともな要請に対して少なくとも効率的に対応することは不可能であった。また、学生の方でも進学率が33.5%（資格取得者は37.2%）という程度に大衆化・民主化すれば、能力や目標などの点でもいろいろ問題が発生するのは当然で、かつてのエリート教育の理念は時代に適合しないものと受け取られるようになった。「ドイツ大学の理念はすばらしいがそれは十九世紀向きなものだ」という声が高くなってきたのももっともであろう。大体伝統型大学では卒業というものが極めて曖昧という欠点もあった。「博士」の学位を取得するか何らかの「国家試験」（司法職、医師、教員など）に合格して大学を去るという趣きのものであった。これは早くから問題になり、まず「マギスター」Magister Artium（修士）が導入され幾らか短期間で卒業の区切りがつけやすくなった。なお理工系・実業系学部などでは「ディプローム」Diplomという学位が準備されていて、これにはかなりの歴史がある。この状況は現在でも主流で、ドイツの伝統的の大学はわが国流に言えば「大学院大学」ということになる。事実「大学院」という組織は存在しないし、過去においても存在しなかった。わが国の「大学院」は明治時代（明治19年）から存在するが、恐らくアメリカのgraduate schoolにならったものであろう。最近では伝統的の大学でもいくらかカリキュラムの見本が示され、一部ではバチェラーやマスターなどのより短期間で修了向けの学位を準備して区切りを明確にし、かつ容易にしてはいるらしい。これは国際化という観点からも検討されたわけで、かつてのような余りにも大きな学習の自由は危険でもあり、ドイツ大学は外国人学生にとってはその魅力を失っていたという事情もあった。因みに目下ドイツは国際的に自国の高等教育の売り込みに熱心で、GATE（Guide to Academic Training and Education）Germanyという運動を展開している。こうした改善にもかかわらず、しかし依然として伝統的の大学の姿勢はかつての理念の長所を肯定していると思われる。

この曖昧な、しかも長期間かかる不経済で非能率的な一と産業界の経済原則には映る一教育制度の補完、ないし対応策として「ファッハホーホシューレ」が60年代終から70年代にかけて登場してきたわけである。すなわち産業界の要望にそって、高等教育レベルの専門職業教育を効率的に、つまり速やかにかつ質的にも高めることを目的にしている。この新しいタイプの大学は伝統的の大学とは異なって一般に総合性はなく、従って小規模、また性質上「工学」「法学・経済学・社会科学・社会福祉」の分野に偏っている。しかし1969年以降総合大学と同等の「大学」として格付けされ、同様の自治も認められている。そして1997

年のデータでは全大学卒業生の32%がこのタイプの大学出身者で占められ、技術系では約半数に達するというから、所期の目的は達成されつつあると思われる。DAADのパンフレットは「ドイツ大学新制度の特色」<sup>(9)</sup>と記しているが、むしろ国際的に見れば他国の制度に接近したということであろう。多くの発展途上国などからの留学生にとっては魅力が高まると思われる。また元来工科大学や実業部門ではプラクティクムPraktikumと称される「実習」が重要視されてきたが、ファッハホーホシューレはもちろんこれを重視し、より短期間に効率良く実践的な学習効果を挙げることを目指している。つまり伝統的大学の手直しでは不十分な領域をカバーしようとするものであろう。一般に実習を含めて8学期で終了できるように整備されたカリキュラムが示される。このうち2学期程度内外の企業や行政機関での実習が義務付けられている。卒業者には「実業ディプロム」Diplom (FH) が授与され、一応伝統的大学の理工系・実業系のディプロムとは区別はされている。

以上が最近のドイツの新しい大学制度の概要であるが、こうした制度を支える法的整備も行われた。その一つにこれまで州に委ねられ連邦レベルでは存在しなかった「大学枠組法(大綱法)Hochschulrahmengesetz(1976)の制定がある。この新しいタイプの大学類型もここで大学として他の「ユニヴァーシティ」などと同等の高等教育機関と規定されている。今後、この新大学類型と現今1割程度の私立大学が、どのような展開を見せることになるのか、またさらにどのような変革を迎えることになるのか、そして枠組法でも謳われている大学間の国内および国際的な協力はどのように進展するのか、ドイツ大学は再び国際的魅力を増すことになるのか、ドイツがかつてユニヴァーサルな意味での大学理念の輸出国であったことを考え合わせると、今後の展開には世界が関心を寄せる価値があろう。見守りたいと思う。<sup>(10)</sup>

### 「ファッハホーホシューレ」の現状

ここでさらにこの新しいタイプの大学の現在の一般的状況について補足したいと思う。まず数値的データであるが1999年のデータでは323校であった高等教育機関は最近のデータ<sup>(11)</sup>では326校となり、内訳は総合大学類型が118校で変わらないが、芸術系大学が1校増加して53校、ファッハホーホシューレは2校新設され155校を数える。ついでに設置者の種別を紹介すると、国(州)立が総合大学89校、ファッハホーホシューレ103校、芸術系大学45校、教会関係設置がそれぞれ17, 18, 8校、純粋な私立は総合大学12校、ファッハホーホシューレ34校で芸術系の私立大学は存在しない。機関数だけからいえばファッハホ

ーホシューレの方が多い。もっともここにはいわゆる「行政専門大学」が31校あり、これを除外すれば一般学生向けの大学は校数という点ではほぼ折半されることになる。

しかし専門分野の総合性ないし多様性と学生数による規模ということになると、先述のようにファッハホーホシューレは分野・学科は少なく学生数も少ない。例えばDAADの紹介によるとファッハホーホシューレも全体としては実に211に及ぶ分野の教育・学習の可能性が存在する。<sup>(12)</sup>一方総合大学は全体として252分野の多彩さを示すが、これは先の数に比較してそれほど多いとは言えない。しかし1大学としてみた場合は大きく異なる。すなわち前者にはそれほど多くの専門分野は準備されていない。例えばアーヘンFHは23専攻分野Studiengangの学習が可能であるが工学と経済・経営学分野に集中している。学生数はファッハホーホシューレでは大きい方で7,874人。同じアーヘンの工科大学(学生数28,000人)は今日総合大学として組織されていて、その名称にもかかわらず、工学系はもちろん、英語・英文学、生物学、地学・地理学、独語・独文学、歴史学、芸術史、医学、哲学、政治学、心理学、ロマンス学、社会学、言語教育、歯科医学などを含む41分野をカバーしていて総合性がうかがわれる。伝統的な総合大学はもちろんこれを上回る総合性を示すのが普通である。ミュンヘン大学(学生数41,302人)は実に85分野を擁する。アーヘン工科大学例でも示されるように総合大学は、通常の意味でいわゆる「実業」ないし「実践的」ではない科目にも十分配慮されているが、ファッハホーホシューレはその創設目的から当然とはいえ実践・実業的な科目・分野に限定されている。

学生数の規模は当然また教授や職員数にもかかわる。ドイツ統計局の最近の資料<sup>(13)</sup>によると統計基準の相違かと思われるが現在高等教育機関は358機関とされている。ここに学ぶ学生が1,799,300人、職員数が488,700人、この内教員が219,300人、単純平均で1機関当たりの学生数は5,025.9人、職員数は1,365人、教員数は612人、1職員当たり学生数は3.68人、また1教員当たり学生数は8.2人という数値になる。これをファッハホーホシューレとその他大学で比較してみると、それぞれ、2,437/7,888人、311/2,530人、203/1,065人、7.8/3.1人、11.9/7.4人となり数値的にみれば前者の規模が小さく、かつ財政的にも効率的な機関という印象がえられる。因みに外国人留学生の割合は前者FHで8.1%、後者で11.2%である。伝統的の方が外国人の割合が多いことになる。

以下さらに主としてDAADの資料<sup>(14)</sup>に基づきその特徴・特色を補う。

ファッハホーホシューレの特色は何より比較的短期間の

職業専門教育と実践・実務に重点がおかれている点にある。産業界のニーズの高い、すなわち就職に有利な専門分野の専攻課程を提供し、比較的にコンパクトに構築されたカリキュラム、少人数での教育、学習と平行して実施される試験制度などにより、総合大学における通常の学習期間より短期間の卒業を可能にしている。授業が行われない休暇期間も一般大学より短いことが多い。しかし学術性が放棄されているわけではなく、ファッハホーホシューレにおいても教育と平行して研究も行われる。ただこの研究は一般により実用・応用的傾向の強いテーマに関わることになっている。従って純粋に理論的な専攻分野、またいわゆる希少特異分野や純文科系の科目は存在しない。先述のように具体的には工業系、経営系、デザイン系、社会福祉系の高等専門教育を志向するものである。学位は「ディプローム(FH)」,つまり総合大学の理工学系の「ディプローム」と区別して(FH)が添加される。これと平行してバチュラーやマスターのような国際的な学位を授与するコースも次第に多くのファッハホーホシューレで採用されている。

設置の経緯については前章でやや詳細に述べたが、要約的に繰返せば60年代末以降高まってきたドイツ産業経済界の要請、すなわち国際的競争力を向上するために高等教育を受けた専門職業人を速やかかつ効果的に養成するという要請が原動力であった。その際母体となったのは工学系・経済系などの実業専門学校類型であったらしい。先述のように法的整備も行われ、ファッハホーホシューレは総合大学類型と同等とされ、研究・教育の自由と自治が保証されることになった。その設置者の多数派は国すなわち州である。

限定されているとはいえ多数の専門分野が提供されていることについては先述の通りである。行政専門大学も含めればもっと専門分野は多彩となろう。なおこれと並んで「連合大学」でもファッハホーホシューレ課程の教育コースが提供されている。またバイエルン州の4総合大学は同様のファッハホーホシューレ課程を準備しているらしい。この類型の高等教育に対し社会的要請が高いことを示唆しているであろう。効率的に卒業でき就職率なども良いようであるから、これは学生の側からも次第に迎え入れられることになろう。なおファッハホーホシューレは地域的にも新旧ドイツの各州に遍く設置されているが、その際、総合大学では期待できなかったような、それぞれの地域経済・行政機関との密接な協力が期待されている。卒業研究も地域の企業等との協同で行われことも多く、その結果学生にとっても産業界の要請・実情に即した学習が可能となる。従って就職という点でも一般総合大学の卒業者より有利になることが多い。

ファッハホーホシューレの教員も「教授」Professorと

「講師(教員)」Dozentと称されるが、学術的研究業績と並んで実践的な職業経験が一般に要請される。通常5年間の職務経験が必要とされる。絶対不可欠かどうかは不詳であるが、少なくとも重視されることは確実で、この要請はいかに実務志向が強いかということをお互にわかせよう。

ファッハホーホシューレの組織・構成・運営は総合大学に準ずるものとなっているが、大体数年の任期の「学長」Rektorあるいは「総長」Praesidentによって代表され、さらに大抵は「副学長」がおかれている。これにわが国の国立大学の事務局長に相当する行政職として「カンツラー」Kanzlerが存在する。意思決定の最高機関は「グレーミウム(協議会)」Gremiumと称され、教授、教育職員、その他職員、学生の代表から構成される。その他職員、学生代表が加わるころは一般の総合大学でも同様であるが、わが国の多くの大学の制度との大きな相違である。この機関は大学によっては「評議会」Senat, Konzilとも称されるようである。なお審議事項はわが国の教授会・評議会に相当するものを包括している。教授以外のメンバーが加わるとはいえ、教育・研究問題及び教授人事に関しては、教授代表の発言権が最も重視される仕組みになっているのは当然であろう。

それぞれのファッハホーホシューレは「専門分野」Fachbereichに分かれる。各専門分野には幾つかの専攻課程が設置されている。例えばアーヘンFHは23の専攻分野が12専門分野を構成、南ドイツのアウクスブルクFH(学生数3,582人)は11専攻分野が7専門分野を構成している。専門分野は「専門分野長」Fachbereichsleiter, Dekan<sup>(15)</sup>によって代表される。専門科目と並んで一般的科目として法学、社会学、哲学のような学科目が存在する。外国語などもここに属している。わが国のかつての教養科目ないし一般教育科目に相当するであろう。さらに注目すべきは例えば「経済英語」のような科目では履修すると一種の資格証明書が授与される制度があることであろう。当然この組織に相当する施設、すなわち研究室・実験室・講義室その他各種の設備・スペースが設けられている。その他総合的施設として図書館と計算機センターが存在する。一般の総合大学、特に歴史的な大学では、その施設がしばしば市内の各地に分散していることが多いが、ファッハホーホシューレでは一般にまとまっているようである。

学生の身分に関しては総合大学と同様ファッハホーホシューレでも「一般学生委員会」AStA(Allgemeiner Studierenden Ausschuss)他のさまざまなレベルでの自治組織によって保護されている。この組織を通じて学生の権利を主張することができる。また留学生サービスについても一般大学同様に配慮される。

最後に教育の特色についてももう少し具体的に紹介する。

授業は半年間の「 Semester」で区分されている。わが国の後期にあたる冬学期 Wintersemester は9/10月に、また前期にあたる夏学期は3/4月に開始され実際の授業は4-5か月間のみ実施される。もちろんわが国と異なり冬学期から学習は開始される。休暇は復習と次学期の前の準備保養の期間でもある。もちろん休暇中にも実習に従事したりゼミナール用の報告作成などの準備にあてられることもある。ファッハホーホシューレでの学修は内容面でも形式面でも伝統的の大学に比較してかなり規定されている。正規修学期間は先述の通り8学期、すなわち4年間である。この8学期はさらに基礎課程 Grundstudium と専門課程 Hauptstudium に区分され、この中に企業・公的機関での実習の1ないし2学期が組み込まれる。ファッハホーホシューレの学生は、通常の総合大学の学生とは異なり一般的にこの学習期間で卒業するようである。

新しいバチェラー・マスター課程では、どちらかといえば一般教育的な基礎学習を簡略化しより特殊な専門領域に専念するが、6学期を区切りとして第一段階の専門職のバチェラー資格が付与され、労働市場の需給関係に適合した教育を志向するといえよう。このバチェラーの基本的専門職養成はさらにマスター課程での養成により補充される。これは通常さらに4学期を要する。つまり計10学期、5年間の養成課程で、年齢的には国際標準コースに一致するシステムである。

基礎課程は通常2-4学期間配分され中間試験 Vorprüfung, Vordiplom, Zwischenprüfung で修了するが、これは就職資格を意味しない。この課程ではそれぞれの専門で必要な基礎的知識の修得と応用が試みられる。どちらかといえば規定された時間割による必修の学習プログラムが提示される。週当たり25ないし30時間が必修でこれに実習・実験が加わる。一般的に後半ではいくらかの選択が可能になる。

専門課程では基礎課程に比較して選択可能性は増加するようである。基礎課程で修得の基礎知識を深めるとともに、幾つかの専門領域から個人的な関心に基づき選択して重点化・専門化がはかられる。わが国のいわば選択必修的な制度に類似したものであろう。

実習学期は専門分野により1ないし2学期設定されていて、企業・公的機関での実習にあてられる。このような職場での実際の学習は比較的長期間にわたり専門知識と能力の養成のために活用される。この実習は国内、国外で可能で、留学生の場合は母国でという可能性もありうる。さらにこの期間にも大学におけるケアというか、補助的ゼミナールなどでフォローされるのが一般的である。例えばアウクスブルク FH では第3学期と第6学期に実習を規定しているが、それぞれ6-4時間の関連のゼミナールなどを設

けている。もちろん実習期間中はそれ以外の授業はない。

ファッハホーホシューレでは最後にディプローム (FH) の学位を取得して卒業となるが、この学位取得には実習学期を含めて8学期の勉学に加えて、かなりの分量のオリジナルの応用学術的論文 (ディプローム論文 Diplomarbeit) の提出が必要であるが、この論文は通常2-6ヶ月の定められた期間に作成される。その後筆記試験・口述試験が課される。かなり厳格なシステムであろう。この学位は様々な民間企業や公的機関への就職資格となる。バチェラー、マスターも同様就職資格を付与する。なお、学位としては専門分野が付加される。例えば経営経済学では Diplom-Betriebswirt (FH), 商学では Diplom-Kaufmann/Kauffrau (FH) などと表現される。

授業形態について触れれば、まず講義 Vorlesung があるがこれは主として教授・講師の一方的な伝達形式で質疑・討論は通常行われない。演習 Übung は基礎課程の授業で学生の積極的参加が求められる。講義テーマと関連することも多い。ゼミナール Seminar は専門課程になって開講される専門演習である。形式的には演習に準ずるがより特殊なテーマを取り上げる傾向にある。中間的な基礎ゼミナール Grundseminar が開講される場合もある。講義以外のこれら授業では本来25-30人という小規模のクラスが原則であるが、実際には経営経済学のような人気のある分野などでは50人を超えることも稀ではないらしい。演習類はいずれも報告論文の評価あるいは筆記試験などの成績評価を伴う履修証明証 Schein により履修が確認されるようで、わが国の単位制度に類似の制度が採用されている。

これに実習 Praktikum が加わるが、これは企業などでの実習を意味することもあるが、授業としての実習は実験室や野外での実習、またコンピュータに関わる授業などを指す。

なおこれらの授業形態は参加者数、従って指導の効果という点を除いて、伝統的の大学の制度で久しく行われてきたものでもある。また実習も実践的専門では自明のものであった。

その他日帰りから数週間に及ぶ研修旅行 Exkursion が多くの専門分野で提供され、必修となっている分野もあるらしい。またいわゆるチューター制度 Tutorium も採用されているらしく、専門ゼミナール参加者が後輩を指導して一定の効果あげているという。教員による教育を補足するものとして評価されよう。これは指導する側にもメリットがある。もっとも、この制度も現今では一般大学でもかなり取り入れられているようである。

ファッハホーホシューレの卒業生にはさらに2-4学期の大学院・専攻科風の上級教育課程も準備され、より高度な資格が付与される。例えばマスター課程はその例である。

これはわが国流には大学院であるが、ドイツではそのようには理解されていない。そして博士学位授与権は伝統的综合大学にのみ認められている。またドイツで重要な教授資格授与権もファッハホーホシューレには認められていない。しかし優秀なファッハホーホシューレ卒業生は総合大学において博士学位請求が可能となるように法的整備が進められつつあるらしい。

以上まとめれば、これまでのドイツ大学の制度に比較してファッハホーホシューレはかなり規制された教育機関という印象を与えるであろう。見方によっては専門・実業学校の格上げで、かつて専門職養成機関としての専門学校の教育との区別を意識していたドイツ大学の理念からいえば、矛盾を感じないでもない大学類型であろう。しかし、枠があるとはいえ「学習の自由」がこのファッハホーホシューレでもかなり尊重されているということを DAAD が強調しているのは注目される。すなわち「ドイツのファッハホーホシューレにはコース制度 Kurssystem はない。その規定は学生の勉学の期間や内容について確かに完全な自由は認めてはいないがかなりの自由 *manche Freiheit* を認めてい

る」と記している。<sup>(6)</sup> ここでいうコース制度とは完全に規定されたカリキュラムの履修を要請する課程を指しているであろう。この「学習の自由」はファッハホーホシューレでも配慮されている「研究」や一般教養的な科目とともに確かに伝統的理念につながるものであろう。専門職養成機関と伝統的の大学教育理念を何とか有機的に結合しようと試みているのであろう。ところでこのドイツの新型大学は、専門学校を格上げしたかつてのわが国の新制大学の設置を思い起こさせないでもないが、わが国ではその際どちらかといえば教養主義が強調され、伝統的の大学類型を目指していた。もちろんその際旧制大学との区別・差別がなくなった訳ではなかったが。これに対しドイツではむしろ実用主義というか専門職業教育の即効性がまず重視され、伝統的の大学では実現できない教育・養成機関を目指した点が大きく異なるといえよう。しかもこの新型大学はいわば高等(第3次)教育の不備を補うものとして設置され、伝統的の大学に対してもなお部分的改善は要請されるではあろうが、依然として多大な財政的援助が続けられるという慎重かつ余裕のある教育政策はとりわけ評価されるであろう。

## 注

- (1) 本章は 2002 年 2 月 19 日金沢経済大学・経済学会研究会での講演「最近のドイツの大学 ―二つのタイプ：伝統的の大学と新タイプの大学」の原稿内容をそのまま文体のみ改めたものである。
- (2) メツガー著・新川健三郎／岩野一郎訳『学問の自由の歴史 2 ユニバーシティの時代』東京大学出版会 1980, 512 ページ
- (3) オルテガ・イ・ガセット著・井上正訳『大学の使命』東京 玉川大学出版部 1996, 64 ページ
- (4) ヤスパース著・桑木務編『大學の本質』東京 新潮社 1954, 7 ページ以下
- (5) Die Idee der Universitaet. Versuch einer Standortbestimmung. Berlin u.a. 1988
- (6) 「ドイツの大学―交差文化的視点から」金沢経済大学論集 35-3, 21-30 ページ
- (7) DAAD. Studium in Deutschland. Informationen fuer Auslaender ueber das Studium an deutschen Fachhochschulen. 6. Aufl. 1999
- (8) 日本経済新聞 2001 年 7 月 3 日「国立・私立、競わせ大学改革」(某私立大学長)
- (9) DAAD, 8 ページ
- (10) 質疑応答等について簡単に紹介する。Q: 本学が提携するなら「専門実業大学」が適しているということでしょうか。A: 大学院ができたばかりですが、モデルとしては適して

- いると思われますのでコオペラティブのパートナーとしては良いかもしれません。それにマスター学位を授与する実業大学も存在します。Q: ヨーロッパの他の大学はどのような状況なのでしょう。例えば同じドイツ語圏のオーストリアなど。A: 少し相違はありますが原則的に似ています。ただ国によっては違う制度もあり、例えば東欧などには入試制度などもあるようです。補足: イギリスはかつての伝統的の大学のカレッジ制度に特色があり、フランスなどでは国のコミットメントが中央集権的な印象を受ける。いくらかの国家文化的相違、国柄がある。Q: どこかで商科大学の教育批判の論文を読んだような記憶があるのですが。A: 多分マクス・ヴェーバーのライプツィヒ商科大学批判かと思います。『ウェーバーの大学論』という訳書に入っていたように思います。実用教育志向と高度な教養理念の対立は過去においてもかなりあったようです。
- (11) ドイツ学長会議の Web ページ [www.hochschulkompass.de](http://www.hochschulkompass.de) による。
  - (12) DAAD, 50-91 ページに各大学の専攻のリストが掲載されている。
  - (13) Statisches Bundesamt Deutschland の Web ページ Hochschulstandort Deutschland 2001 による。
  - (14) DAAD, 8-15 ページ
  - (15) この語は通常「学部長」として使用されていたが最近では広い範囲に用いる。
  - (16) DAAD, 15 ページ

“Fachhochschule” — Das Hochschulsystem in Deutschland heute  
 Kontakt : Prof. Hiroyuki Tanaka. E-Mail: [tnc@spacelan.ne.jp](mailto:tnc@spacelan.ne.jp)

